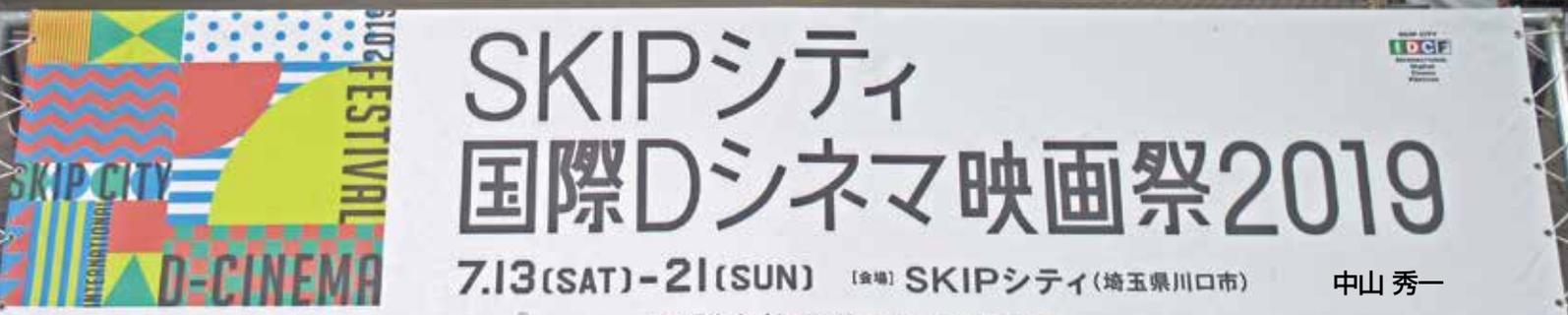


第16回 SKIP シティ国際Dシネマ映画祭



今年で第16回を迎えた「SKIPシティ国際Dシネマ映画祭」は、7月13日（土）から21日まで9日間にわたり、例年どおり埼玉県川口市にある「SKIPシティ彩の国ビジュアルプラザ」で開催された。

奥野木川口市長の挨拶にも「昨年は猛暑が続き、熱中症の注意報が出るほどで心配だったが、今年は涼しいのでお客さんも大勢来て頂けるものと期待している」とあるように、今回はしのぎやすい9日間であった。

映画祭幕開けの3連休には、「SKIPシティ夏祭り」が併催され、屋外の広場は地元の家族連れで賑わった。この夏祭りには、小学生たちのダンスの発表会など、各種のイベントが用意され、市民参加型の映画祭



マジシャンの曲芸を楽しむ地元の家族連れ



期待がふくらむ広場でのランチ



連休3日目には屋台も出て大賑わい

として大いに気分が盛り上がった。

☆オープニングセレモニー

初日には恒例のオープニングセレモニーが行われ、映画祭・実行委員会会長の上田清司埼玉県知事、同副会長の奥野木信夫川口市長、総合プロデューサー八木信忠氏から挨拶があった。

次いで、映画祭ディレクターの土川勉氏から、ノミネート作品が紹介され、来日したゲストが登壇した。

さらに、国際コンペ、国内コンペの審査員が紹介されて、オープニング作品の上映に移った。

☆オープニング作品の上映

恒例のオープニング作品である。今年は注目の新作『イソップの思うツボ』が上映された。何故に注目かという、この『イソップの思うツボ』は、昨年6月に公開されて空前の大ヒットとなった『カメラを止めるな!』の監督たちが製作しているからだ。

因みに、『カメラを止めるな』は、300万円の製作費で30億円を超える興業収入を上げたという。

☆上田慎一郎監督の抱負と挨拶

「この企画は、もう2年も前に、3人が居酒屋で話ながらスタートしました。その後2年もの間、堂々めぐりをしてきた末に、今回実現したものです。

設定された3家族に、3人の監督が1人ずつ担当して1本の長編映画を作るというのは、世界的に見ても例をみないことだと思います。

まわりの男たちから、絶対にうまく行かないから止めとけと言われてたのですが、言われれば言われるほどやってみたくなってチャレンジした映画で、評価はこれからです。今から思えば、すでに撮影中から手ごたえを感じており、実にうれしかったです。これはエンターテインメントですから、リラックスして観て頂きたいと言いたいところですが、結構、序盤から色々な仕掛けがありますので、前のめりになって楽しんでください!」



コンペ作品の監督たちを迎えて主催者側と記念撮影



審査員の登壇、右から、☆国際コンペティション：三池崇史・審査委員長（映画監督）、佐藤現・審査員、ヘディ・ザルディ審査員、ワウン・ハディ審査員、☆国内コンペティション：荻上直子・審査委員長（映画監督）、坂野ゆか審査員、ジェイソン・グレイ審査員



トリプル監督と出演者が登壇して作品をアピール



登壇して抱負を語る3監督：左から浅沼直也監督、上田慎一郎監督、中泉裕矢監督

『カメラを止めるな!』の製作では、中泉裕矢監督が助監督を務め、浅沼直也監督がスチール写真を担当して上田監督を支えた。この3人の監督が、共同監督という立場で参加した作品が、今回上映の『イソップの思ッポ』である。トリプル監督による作品とも言われている。この作品は、8月16日から全

国一斉公開となっているので、この映画祭でのオープニング上映は公開に先立つプレミアショーということになる。

この3人の監督は、この映画祭で育ったとも言える経歴で、作品のノミネート、受賞、などの実績があり、中泉裕矢監督は、昨年のオープニング作品『君がまた走り出すとき』の監督を務めている。

今回の『イソップの思ッポ』では、それぞれ異なる環境の家庭を持つ3人の少女がキーとなる。1人は金魚鉢で飼っている“カメだけが友達”という暗い性格の女子大生、もう1人は大人気“タレント家族”の娘、あとの1人は“復讐代行屋父娘”として暮らしており、背が高くて蹴りが強い女、この3人の少女が出会ったとき何が起きるのか…。

この作品でも、上田監督作品らしく、どんでん返しがあるのか、それは観てのお楽しみである。この記事が掲載される時には、すでに興業成績は発表されているだろう、ヒットを期待したい。

☆今年のノミネート作品の特長

今年の国際コンペティションでは、女性監督の作品が多かった。ノミネート作品10本のうち、女性監督が5人で半数を占めている。なお受賞作品に絞ると、監督賞を受賞したブルガリアの作品『イリーナ』の監督ナデジダ・コセバさん1名が女性である。

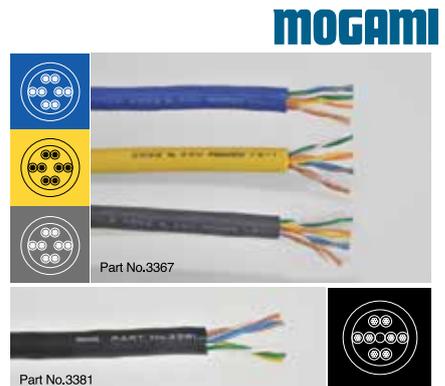
また内容的には、世界の難民キャンプや保護区を舞台にした作品が多かった。最優秀作品賞の『ザ・タワー』は、バイルト

MOGAMI LAN CABLE

**モガミイーサネットケーブル
施工工事用 LANケーブル**



施工工事時に有刺鉄線のようにならず楽に配線出来るよう、平らにまっすぐ収まるように設計されたLAN CABLEです。UL VW-1 難燃規格にも適合しており、標準で3色（青・灰・黄）用意しました。また、平均的な減衰測定値から90m前後まではTIA/EIA-568B Cat-5e 規格値を満たしますので、両端に接続される機器の電氣的性能によりそれ以上の長さで使用出来る場合や、逆にそれ以下の利用長に制限される場合がありますので、際どい場合には利用前に実地確認する必要があります。3381タイプは3367同様柔軟で、イベント設営等に適するようケーブル中心に介在糸を入れて引っ張り強度を約30%上げてあります。ジャケット色は黒のみです。



モガミ電線株式会社

お問い合わせ

モガミ電線株式会社 PHONE: (0263) 52 0131 E-MAIL: sales@mogami-wire.co.jp URL: http://www.mogami-wire.co.jp

のパレスチナ人難民キャンプが舞台。

監督賞の『陰謀のデンマーク』は、移民問題を題材にした政治サスペンスドラマである。さらに、審査員特別賞の『ミッドナイト・トラベラー』は、危険なアフガニスタンを脱してドイツに亡命すべく、家族を連れた逃避行を、監督自身が撮影したドキュメンタリーだ。

今回のノミネート作品では、意欲的な表現スタイルを試みた作風が何本か見られた。その代表格は、上映時間 98 分を、全編ワンカットで表現した作品『ブラインド・スポット』とか、作品の舞台を、ある画家のアトリエと庭に限定して、出演者が入れ替わり立ち代わり現れてストーリーが進行するという、あたかも舞台劇を連想させる作品『パッド・アート』がある。

その中でも特筆ものは『ブラインド・スポット』で、1 時間半の全編を完全ノーカットの長回しで仕上げた、ノー編集ワンカット作品である。これはフィルム時代には不可能だったが、デジタルシネマの機能が、伝統的な映画表現の概念を変えるような実験的な作品だ。

☆クロージングセレモニー（表彰式）



国際コンペの最優秀作品賞を読み上げる上田清司実行委員会会長・埼玉県知事

7月21日、7日間にわたり上映されたコンペティション作品が、審査を終えて表彰される日である。

会期中に起きた「京都アニメーション」の放火事件に対し、上田清司埼玉県知事はじめ、海外作品の受賞監督からも、同業仲間の痛ましい事件として哀悼の意が述べられた。

《受賞作品》

今年を受賞作品は下記のように発表された。

【国際コンペティション（4作品）】

①最優秀作品賞&観客賞（W受賞）

『ザ・タワー』2018年/ノルウェー/フランス/スウェーデン/77分 監督：マッツ・グールドゥ

②監督賞-1

『イリーナ』2018年/ブルガリア/96分 監督：ナデジダ・コセバ

③監督賞-2

『陰謀のデンマーク』2019年/デンマーク/119分 監督：ウラー・サリム

④審査員特別賞

『ミッドナイト・トラベラー』2019年/アメリカ/カタール/カナダ/イギリス/87分 監督：ハサン・ファジリ

【国内コンペティション（5作品）】

①SKIPシティアワード（長編）

『ミは未来のミ』2019年/日本/62分 監督：磯部鉄平

②優秀作品賞（長編）

『サクリファイス』2019年/日本/76分 監督：壺井 濯

③優秀作品賞（短編）

『遠い光』2019年/日本/19分 監督：宇津野達哉

④観客賞（長編）

『おろかも』2019年/日本/96分 監督：芳賀俊/鈴木 祥

⑤観客賞（短編）

『歩けない僕らは』2018年/日本/37分 監督：佐藤快磨

☆国際コンペ審査委員長：三池崇史監督の講評



国際コンペ審査委員長：三池崇史監督

国際コンペティション部門の長編 10本、いずれも素晴らしく、キャリアの浅い新人が作ったとはとても思えない、技術的にも、志も、レベルの高い作品ばかりでした。

審査をするうえで戸惑ったのは、ジャンルがそれぞれ違うこと。サスペンスや日常を描いたもの、居場所を失った移民、困難な状況に置かれた人間の内面を描くキュメンタリー、アニメーションもあり、これぞ

Dシネマ映画祭。普通はジャンルでくるものですが、この映画祭はフリーで、作品に垣根がない。この映画祭らしさはそこにあると感じました。

この映画祭は非常に優れていて、個性的、そして自立しています。埼玉県も川口市も誇るべきことです。現場の人間を代表して言いたいのは、この素晴らしい映画祭を大変ですが、続けていってくださいということ。次の世代の作品たちに出会えたことを幸せに思い、自分も引退まで頑張りたいたいと思います」（要約）

☆国内コンペ審査委員長：荻上直子監督の講評



国内コンペ審査委員長：荻上直子監督

『ミは未来のミ』（SKIPシティアワード）の童貞男子のバカバカしい会話と、あほらしい行動力がさすがしくて、いとおしくなりました。私たち審査員は、磯部監督の次の作品に期待し、この賞を贈りました。

デジタル化が進んでクオリティがアップして、このまま劇場でかけられるのではないかという作品もいくつかありました。

一方で、本当に作りたくてしょうがない、パッションの満ちた、ほとぼりするような、狂ったような映画は、近年なかなか見せてもらえない。それは、ちょっと残念に思います。

私も自主映画出身で、みなさんがどれだけ映画を作りたくてしょうがないかは、わかっているつもりです。10年後、20年後もずっと作り続けてください。

☆国際コンペティションの受賞作品紹介

①『ザ・タワー』：最優秀作品賞&観客賞(W受賞)

この作品は、審査員による選考の「最優秀作品賞」と観客による投票結果「観客賞」が一致したという、過去にもめずらしいケースだ。つまり、プロとアマチュアの評価が一致した W 受賞の作品である。



マッツ・グルドゥ監督に代わり出席のパトリス・ネザンプロデューサー、完成には8年を要したと受賞の挨拶



少女ワルディはキャンプに住む曾祖父シディが大好き



屋上屋を重ねた難民の住居、晩年の曾祖父は上階の植木鉢と共にブルーシートのテントで暮らした。

さらに、16年の歴史を持つ本映画祭で、長編のアニメ作品が、コンペティションにノミネートされるのは、初めてのケースだということだ。そして、この作品は完成まで、なんと8年も要していると、グルドゥ監督の代理で出席したパトリス・ネザンプロデューサーは受賞の挨拶で述べている。

マッツ・グルドゥ監督は、ノルウェー出身の映画監督・アニメ作家・ドキュメンタリー作家で、1990年代には、レバノンのベイルート・アメリカン大学に通いながら、ブルジュ・バラジネ難民キャンプで英語とアニメを教える。そこで見聞した難民の話をもとに、本作品の脚本を書き上げたという経歴である。

マッツ・グルドゥ監督自身はノルウェー人だが、母の仕事の関係で、子供の頃からこのパレスチナ難民キャンプで過ごしており、その体験にもとづく作品です。多くのリサーチをもとにして、監督はできるだけ現実を忠実に描こうとしました。とパトリス・ネザンプロデューサーが語っている。

この人形アニメのために作られた撮影のステージには、すでに70年もの歴史を経たパレスチナ難民キャンプが、ミニチュアのセットで再現されている。キャンプの住宅地は、難民たちが自由に建て増して膨張してきたと思われる、独特の石造りの

住宅街だ。

曲がりくねった細い路地、既成の建物の屋上は、天に向かって増築を続け、屋上屋を重ねて出来上がっている独特の光景だ。これには、一種の「無秩序の様式美」を感じさせるから不思議である。「天に延びれば神に近付く…」というセリフも聞こえる。映画のタイトル『ザ・タワー』は、この神に向って延びる屋上屋の林立から名付けたものだろうか。

このような住宅街に、難民たちの家族が親戚たちと共に、隣どうし寄り添って暮らしている。この映画では、人形アニメの生活シーンを、このミニチュアのセットで撮影している。

作品は、このような地域に住む、パレスチナ人家族の少女ワルディが主人公である。少女は祖父と祖母の部屋に住んでいるが、父と母は見当たらない。少女は隣に住む曾祖父シディが大好きだ。しかし少女は大好きな曾祖父から、パレスチナの故郷に残してきた大切な家の鍵を渡されているのだ。したがって少女は、曾祖父がすでに故郷に戻る意欲を失っているのではないかと、不安の日々である。

このアニメ作品は、粘土細工による人形アニメで現在のシーンを描き、過去の回想シーンは素朴な味わいの手書き平面アニメーションで表現している。

さらに家族がテレビを見るシーンでは、過去のパレスチナ戦争のニュース映像を、実写映像でそのまま使用している。

また、パレスチナの故郷で撮った写真アルバムを見るシーンがある。少女が見せてもらう写真には、少女のワルディの姿が写っているが、それは人形ではなく人間少女の写真で、次元が倒錯する独特のリアリティを感じさせる。

このような層の厚い表現手法で、少女ワルディの日常生活を中心に、難民キャンプの住人達を淡々と描いている。曾祖父が少女に言って聞かせる、回想のシーンでは、イスラエルの軍力で、一方的に故郷を追われたパレスチナ人の窮状を訴えている。回想シーンでは、散発的に銃弾が飛んで来たり、ヘリコが大きな爆音を立て、超低空飛行をしたり、これらの嫌がらせが日常化している様子を描いている。

少女ワルディが、屋上に増築した小部屋にこもって伝書鳩を飼う叔父に、コーヒを届けるシーンが、ラストシーンの伏線となる。曾祖父は隠居して屋上小屋のわきに、ブルーシートで覆ったテントで草花の鉢と共に住んでいる。

ついに曾祖父が、ワルディに看取られて永眠を迎える。すると風が吹き、ブルーシ

ー

neviON Media Gateway to IP

ビデオプロダクション、ビデオ長距離中継伝送、放送スタジオのIP化ゲートウェイ各種インターフェースを取り揃えております。



Virtuoso シリーズ

3GHD-SDI 非圧縮、JPEG2000、TICO、ASI、H.264/AVC Media Gateway, IP Aggregation, Monitor...



非圧縮 16 HD-SDI I/O、SMPTE2022-6 IP コーデック + eMerge 10GBE スイッチ・40 GBE データ・アグリゲーション、SMPTE2022-7 SIPS リダンダントバス構成

Flashlink IP シリーズ

非圧縮マルチプレックス SDI

AES 67 IP オーディオ



製造元：
Nevion AS

輸入販売元：
ネットワークエレクトロニクスジャパン 株式会社

●TEL:03-5542-3260
●http://www.network-electronics.co.jp



トがなくなると、鳩がいっぱい飛んできて、曾祖父の身体を掴んで持ち上げ、満月に向けて昇天して行く。

成績が優秀だったワルディは、念願かなって都会の上級校に通うことになった。ラストシーンでは、横断歩道で信号待ちするワルディの通学姿があった。

②『イリーナ』：監督賞-1



監督欠席のため、ステファン・キタノフ プロデューサーが受賞の挨拶。日本の皆さん、この受賞を縁にヨーグルト以外のブルガリアを知ってください(笑)。

これは、ヨーグルトで有名な国ブルガリアの作品。監督のナデジダ・コセバさんは1974年、ブルガリアの首都ソフィア生まれの女性監督で、国立演劇・映画芸術アカデミーを卒業。その後、数本の短編を監督し数々の映画祭で受賞している。

今回のこの作品は、監督にとって初の長編デビュー作で、ブルガリア国立映画センターの協力を得て制作されたものだということだ。

ブルガリアの貧しい寒村で、一軒家に暮らすイリーナは、2歳くらいの子供と夫と、イリーナの姉が同居する4人暮らし。夫は失業中のようで、夫婦の仲は冷え込んでいる感じ。しかも、イリーナが夜働きに出ている間、姉と夫がセックスをしているという複雑な家庭で、暗いふんいきだ。

不思議なことに、この家は炭鉱の石炭層の上に建っており、石炭を調達するために、家の裏庭に小さなプライベート用の坑道入口を作っている。この私用坑道は、地下2メートルくらいの浅いところに石炭層があり、はしごで降りると容易に石炭を掘り出せるので、調理や暖房用に重宝している。

坑道内には、天井を支える梁を外すためのクサビが打ってある。いざという時には、このクサビをハンマーで叩けば、一瞬にして坑道を消滅させることができる。国有の石炭を盗んでいたことがばれそうになった時に、落盤させて証拠隠滅を計る仕掛けだ。



ブルガリアの寒村に住むイリーナは金策のために代理母になるが、産む段になって母性本能との葛藤が…

あるとき、何者かがこのキーを抜いてしまい、採炭していた夫の下半身が石炭に埋もれて、両足のひざ下を切断する重傷を負い、車いすの生活となってしまふ。

原因は、当家の炭鉱に石炭を盗みにきて、夫といさかいを起こしている男の仕事で、腹いせで落盤を起こしたことが判明する。

イリーナは、以前から務めていたドライブイン食堂の厨房から、残り物を盗んで貧困者に売るようになった。それを買い取る固定客もついている。

家には商品の料理を持ち帰り、生ビールもビニール袋に入れて持ち帰っている。夫はそのビールを夫婦で飲むのが楽しみになっている。しかし、それがエスカレートして大胆になり、同僚の密告で店長にばれてしまい、首になってしまう。この店長は、女子店員にフェラチオをさせるのが趣味で、イリーナはそれを拒んだのが悪かったようだ。

収入の道を絶たれたイリーナは、より収入のよい道を探した結果、代理出産(貸し腹)を請け負うことに決心した。金持ちの夫婦がそのスポンサーで、面接もして正式に契約を交わした。

イリーナの腹の中では、順調に育つ赤子が足で蹴ったりして母親を刺激するので、イリーナの母性本能を蘇らせたようだ。イリーナは、あの金持ち夫婦に、生まれる子供を渡したくない、自分の子供として育てたいという、母性本能と、ビジネスとして契約した自分との葛藤で、心が揺れ動く。一度は引き渡すのを拒否したが、結局イリーナは、生まれた子供と分れる決心をして、心の落ち着きを取り戻したようだ。病院に子供のベッドを残して、名残をしむことなく、さりげなく病院を去る。

心の切り替えが付いたイリーナは、家庭に戻ると、夫が子供を抱き上げて楽しそう

に遊んでいる。戸口でそれを見守るイリーナの後ろ姿で映画は終わる。

この作品は、女性監督らしく、イリーナが遭遇する多くのエピソードを設定して、女性の心理状態を表現しており、女性観客に共感されることだと思う。

③『陰謀のデンマーク』監督賞-2



受賞を受けて、感謝の挨拶をするウラー・サリム監督。今回、日本に来るのは初めてですが、非常に温かく、親切に迎えていただきました。この映画が、この遠く離れた日本の皆さんからも色々と反響をいただけて、一映画制作者、映像作家として希望に胸を膨らませることができました。次回、さらに良い作品を創ろうというモチベーションに繋がりました。

ウラー・サリム監督は、デンマーク生まれで、イラク移民の両親のもとで育った。2018年にデンマーク国立映画学校を卒業、この作品のプロデューサーであるダニエル・ミュレンドルフと共に製作会社を設立している。これまで数多くの短編を制作、今回のノミネート作品は監督の長編デビュー作である。

この作品は、ウラー・サリム監督の長編・初監督作品ということだが、とても信じられないほどの力作で、構成の緻密さといい、サスペンスの設定といい、どんでん返しのシーンも見事で、実に見応えのある映画だ。

この映画の舞台となったデンマークでは、2015年にイスラム系過激派による大きなテロ事件が、実際に2度も発生している。この映画を観ると、あり得ないような極端な話だとは思えないのは、ヨーロッパにおける移民問題が頻発しているからだと思う。

映画は、コペンハーゲンの街中で、デートをしていたあるカップルが、キスをして別れ、彼女が駅への階段を下りたときに、突然大きな爆発があり、付近が炎に包まれた。多分彼女は死んでしまっただろう。

その1年後、事件跡に作られた献花台の傍らでは、頭角を現した極右政党の党首ノーデルが、インタビューに答えながら演説をしており、デンマークから移民を一掃すると、民族の浄化を訴えている。

映画の主役となる19歳の青年ザカリア

は、移民の居住地に住み、ザカリアの進路を心配する母親とまだ甘ったれの弟と3人で平和に暮らしている。

ある日帰宅のため、居住地に通じる連絡地下道に入ると、壁には「移民は出て行け！死ね！」と血で書いた大きな文字が書いてある。住宅入り口のエレベーターホールには豚の頭が二つ、血まみれで転がっている。黙々とそれを仲間と片づけて掃除するザカリア。

ザカリアは、あの落書き事件のショックの影響か、家には帰らずに、「デンマークの息子」という、極貧の移民が密集して暮らす怪しげな集団を訪れる。リーダー役の長老が案内してくれたのは、狭いスペースに、雑魚寝のように暮らす団員たちの姿で、テロリストの温床になり得る集団だ。

長老がザカリアに質問する。「人生に絶望を感じたことは？」「ない」「それなら、ここはお前の来るところではない…」、このような否定的なやりとりで、うぶなザカリアにやる気を起こさせる。このような巧みな話術で、テロリストを仕上げるリーダーには魔力が潜んでいるようで、演技と演出がすごい。

「ここにいる人たちを助けなければならない、お前がその救い主になるのだ！」この使命感をくすぐる言葉で、ザカリアの決心と任務が決まった。今の勢いでは極右の首相にもなりかねない勢いの、ノーデル党首を暗殺する仕事だ。ザカリアの補佐役として、この集団の有能な男マリクが任命された。マリクは落ち着いた、仕事の出来そうな男だ。

ピストルを持たされ、数日間準備と射撃練習をした後、郊外にあるノーデル党首の邸宅に到着。車の中にはマリクが待機して見守り、ザカリアが一人、邸宅の外階段を上って2階の寝室に向う。この寝室にノーデル党首が寝ているはずだ。

ところが、打ち合わせでは寝ているはずのベッドには、枕だけで誰もいない。戸惑うザカリアが外を見ると、すでに警察の車が邸宅を取り囲んでいる。ピストルを撃ったが弾が入っていない、すでに弾が抜かれている。ザカリアはあえなく警察の御用となった。

つまり、与えられたザカリアの補佐役マ

リクは、警察が集団に仕込んでいた「回し者」だったのだ。これには筆者もすっかり乗せられてしまった。

そう言えば、党首暗殺の訓練途中で、この仕事を辞めたければ止められるぞ、という会話がある。この会話の意味には、いくつかの伏線が仕込まれていたことも、今となれば思い出すことができる。

これほどのどんでん返しを、土壇場まで観る者に予測させない演出の巧みさには降伏である。予測させないと言えば、最後の結末も同様、少なくとも筆者には予測できないものであった。

警官のスパイ潜入事件が決着してから、色々といピソードが進行するが、選挙では予想通り、極右政党のノーデル党首が勝利する。ノーデルは大きなホールで、党旗が林立する支持者の席に向って、首相就任を意識した勝利演説をしている。

例によって、「本来デンマーク人は単一族だ」「祖国の戦争は終わったのだから移民は国に帰れ」、等々、過激なフレーズで煽り立てているノーデル党首。画面では、支持者の顔で埋まった聴衆席が、整然と並んだ真っ赤な党旗の林立画面にオーバーラップする。このノーデル党首は、ヒットラーの幻想に取りつかれているように見える。



極右政党の党首ノーデルが選挙の勝利を宣言。埋め尽くす旗を前に演説するヒットラーを連想させる。

演説が終わり、大きな拍手のなかで、突然銃声が聞こえ、ノーデル党首が胸から血を流し、もんどりうって倒れる。そこには、潜入していた例の警察の回し者マリクが、ピストルを触りながら立っている。

ここで、2時間に及ぶ大作が終わり、過ぎたシーンの余韻が、走馬灯のごとく思い出される。

最近では、観終わって食事などをしながら、観た映画を友人と語り合うという作品は少ないが、この作品は鑑賞後に語り合う要素がたくさん含まれている。

また、高校生の課外教材としても優れて

いると思った次第だ。

④『ミッドナイト・トラベラー』：審査員特別賞

ハサン・ファジリ監督は、アフガニスタンで数々の演劇、ドキュメンタリー、短編、TVシリーズの演出を手掛ける。国営放送のために制作されたドキュメンタリー作品「Peace in Afghanistan」(15)では、タリバンメンバーでありながら、武器を捨て平和主義者となったムラー・トゥール・ヤンの姿を描いている。



ハサン・ファジリ監督の家族・2人の娘と奥さん

ハサン・ファジリ監督の一家が、母国であるアフガニスタンを捨てて逃げ出すことになった理由は、上記のように、2015年に国営放送のために制作したドキュメンタリー作品に起因している。このドキュメンタリーの主人公ムラー・トゥール・ヤンが、タリバンメンバーでありながら、武器を捨てて平和主義者になった経緯を描いたからだ。

以来、主人公はタリバンの標的となり暗殺されて、監督自身も死の宣告を受けることになった。そこで、安住の地EUを目指して、一家4人が旅をする逃避行を、監督自身がスマホ3台を使って動画記録をしたという、究極のドキュメンタリーだ。

映画のイントロ映像として、ファジリ監督の家族が、母国アフガニスタンで幸せそうに過ごす様子が、若いときの写真も織り交ぜて、断片的なフラッシュカットで紹介される。自宅近辺で戯れる娘たち、わずかに積もった雪と遊ぶ末娘、家族で訪れた動物園のライオンに眼を見張り、遊園地の回転ブランコに乗って楽しむ家族の明るい表情。

奥さんは屈託のない笑顔の持ち主で、これから始まる逃避行でも、家族の母として、持ち前の明るさが困難を乗り切ってゆくだろうと、観客に安心感を与える。



受賞者たちと審査員の皆さん、そして実行委員の皆さんが一同に登壇し、映画祭閉幕の余韻を楽しんだ

途中の難民キャンプで、よく顔を見せる女性に、「会うたびにきれいになるね」と監督がお世辞を言うと、あとで妻が「自分の夫がほかの女性を褒めるのはいやなのよ」と、笑いながら言うシーンがあり、微笑ましい光景だ。

一家は、北の隣国タジキスタンに庇護申請を出し、そこに滞在して、許可が下りるのを待っていた。ところが14ヶ月も経って下りたのは、「却下する」で、しかも直ちに出国を促されるありさま。やむなく母国アフガニスタンに引き上げることになった。

映画は、アフガニスタンに向けて、タジキスタンを出発するところから始まる。親しい友人と別れのハグをして、一家は荷物満載の車に乗り込み出発。車を走らせ、途中のドライブインでさらに買い物をして、アフガニスタンに向けひた走る。

このとき、運転しているのはファジリ監督で、後部座席の左に奥さん、その右に長女と末娘、フロント右の助手席には、見知らぬ男性、そして走る車から、窓外風景や、車内のようなすを撮影している何かが居るのだが、筆者が見落としているのか、説明がなかったように思う。ひょっとしたら、亡命の仲介業者なのかもしれない。

母国に落ち着いた一家は、いまもタリバンの脅威を感じる毎日である。そこで、保護を求めてヨーロッパに亡命することを決めた。奥さんも娘たちと地図を広げて、行く先のヨーロッパに夢を馳せ、「どこでも行ける国に行きましょう」と楽天的だ。

故郷の街の風景に別れを告げて、ヨーロッ

パを目差し5,600キロの旅が始まった。

9日目：イラン/ゴムに着く。はしゃぐ子供たち。

17日目：イランとトルコの国境。車を捨てて、草地を歩いて移動。子どもたちは遠足気分。次いで、亡命業者が仕向けたマイクロバスか、おんぼろのボックスワゴンに乗る。同じ亡命者らしき人たちで、ぎゅうぎゅう詰め車に揺られて移動。

19日目：トルコの首都イスタンブール。殺風景な宿泊所。これから先のルートを業者と打ち合わせ。道路、海上ルートなどの選択肢。山道のルートを選択。

30日目：トルコとブルガリアの国境越え。業者の案内で荒地を歩き、フェンスの破れ目をくぐって国境越え。

33日目：ブルガリアの首都ソフィアの保護施設。食事が出ない。悪徳密航業者に高い金をだまし取られたのではないかと、普段はスマイルでだらかな奥さんも、監督に言い寄るありさま。ISが難民に対する悪い印象をでっち上げているとテレビの放送。

☆セルビアまでの392キロの旅に出ることを決心。

109日目：ブルガリア・ディミトログラト近郊。一家は野宿して朝を迎える。ほかに同様の人たちが20人ほど同じ行動をしている。

114日目：セルビアの首都ベオグラード。警察に行って紙をもらうと、紙にキャンプの割り振りが書いてあり、やっとキャンプの部屋を与えられる事になった。

189日目：セルビア/クルニチャ難民キャ

ンプ。割り振られた難民キャンプは、家族単位の個室で、やっと一家が人間らしい生活にありつく。娘たちは安堵したのか、スマホの音楽でダンスを踊っている。

560日目：475日が過ぎて、提出してあった亡命申請が審査される日がようやくやって来た。その審査を受けるためには、ハンガリーに行く必要がある。一家は明るい表情で列車に乗り、ハンガリーに向かう。

594日目：ハンガリー/ロスケ（セルビアの国境近く）。



難民申請が認められるまで3か月間、有刺鉄線に囲まれた留置場のような宿舎で待ち続けた

有刺鉄線に囲まれた収容所で3か月が経ち、やっと待ち望んだ一家の難民申請は合法と認められた。これで、一家は母国を出て3年、念願のEUに入ることが許される。

☆国内コンペ作品は、割愛させていただきます。

☆おわりに

今回は、授賞4作品のうち3本が、難民と移民と亡命に関する作品であった。これらの問題が身近な存在ではなかった筆者としては、にわか勉強で何とか糸口を理解できたことに感謝したい。

毎回感じることだが、チケットを買って観に来られる観客の中には、毎日のように通ってこられる方も多く見かける。そしてQ&Aの時間には、熱心に質問される方も多く、特に今回のように難民問題を扱った作品では、食い下がるように質問をされる方もあり、登壇した監督たちも手ごたえを感じているに違いない。市民参加型の映画祭として、市民に根付いている様子が強く感じられた。

Syuichi Nakayama
日本映画テレビ技術協会名誉会員